

リザード
ブド
新道寺

体験版

DOJIN
R18
成人向け

18歳未満の
購入・閲覧禁止



エ ピ ロ ー グ	第 三 章	第 二 章	第 一 章	プ ロ ロ ー グ
P 8 6	P 7 4	P 4 8	P 1 0	P 4

【プロローグ】

熱い全国大会の夏が終わっても、夏の日差しは衰える様子を見せない。連日三十度を超える九州の夏に、白水哩と鶴田姫子は汗を浮き立たせながら道を行く。

「んー、ネットで調べておけばよかでしたね」

「そうやね。思ったより入り組んどつと」

電柱に掲げられた住所と地図を見比べ、哩はふうと息をつく。

『ココの雀荘に居るから、良かったら来てね』

昨日、野依プロからそんな連絡を受けた。

プロ雀士である野依理沙は新道寺の卒業生、つまり二人のOGに当たる人物だ。インターハイも終わり、今は北九州へと戻ってきているらしい。

「江崎先輩たちも来られればよかでしたのにね」

「まあ実家の用事じゃ仕方なか。野依さんもはよ連絡しとつとくれば良かに」

「あの人、突飛とですよね」

頬を膨らませた顔を思い出し、姫子は笑う。それにつられ、哩も頬を綻ばせた。

「メール打つ時も、あん顔なんやろうか」

「頬ば膨らませて携帯握り締める姿が想像できますね」

「そうやね。あ、姫子、喉乾かん？」

自販機を前に哩は足を止める。爽やかな自販機の壁紙はいかにも爽快な甘さを煽ってくる。

「あ、部長」

「よかと。奢らせて」

財布を出そうとした姫子を制して、哩は五百円硬貨を自販機に投入した。ジュースのボタンにパツと明かりが灯る。

「んー。たまにはメロンにしよかな」

姫子が良く飲んでいるメロンソーダがここにも置いてあった。哩にとつては少々甘すぎる味だが、この炎天下の下ならちようどいいかもしれない。

「姫子は？」

「じゃあ、こっちで」

姫子が指差したのは青いパッケージのスポーツドリンクだ。今夏のイメージキャラクターなのかプロ雀士の写



真がパッケージに使われている。

「よかと？ いつもはメロンやろ？」

「部長の飲ませて貰いますから」

「じゃ、私も貰うな」

「はい！」

哩はメロンソーダとスポーツドリンクのボタンを押し、
姫子と交換しながらそれを飲んだ。不思議といつてもより
も甘酸っぱく感じる。

ボトルのジュースが半分になった頃、ようやく目当て
の番地に行きついた。地図を上を下に回しながら哩は首
をひねる。

「この辺りのはずっちゃけど」

「あ、あれじゃなかとですか？」

姫子が指差した先には、薄暗い路地が続いていた。

途中にはミニバンが一番停まっており、その先には『雀
荘』の看板をかけた小さなビルが見える。

「あ、そやね。一本間違とつたね」

メモで名前を確かめ、哩は頷く。

「じゃあ、行きますか——あつ」

路地へと入ろうとした時、角に置かれていたゴミ箱が

倒れた。青いポリバケツの蓋は外れ、紙屑などを路上に
広げる。

「あー、引っかけたつもりはなかとですか？」

「まあ、拾わんな」

しゃがみ込みゴミに手を伸ばす。怪訝そうなスーツ男
性の視線が痛い。全てを元に戻し、立ち上がる。周囲に
は誰も居なかった。

「破れてなかとね？」

「はい。大丈夫とです」

スカートに傷がないことを確認し、姫子も立ち上がる。

「じゃ、行こう」

「はい。部長」

早足に二人は路地へと入った。

靴裏に張り付くような道路に哩は顔をしかめ、そこい
らにゴキブリでも走っていないかと思渡す。

「あ、部長。あれ、野依さんじゃなかとですかね？」

姫子の声に顔を上げる。ビルの二階の窓には頬を膨ら
ませながら打牌する女性の姿が見えた。

「あ、そやね」

ようやく哩はほっと胸を撫で下ろし、地図をカバンの

中へとしまった。

「申し訳なかとです部長。付きあわせてしまつて」

「うん？」

顔を伏せる姫子。沈み込む視線に哩は心情を察する。

「インターハイ、不甲斐なかとです。私がもう少し頑張れとつたらみんなと……」

「何言うとつとか。そんなら部長である私の責任や」

「ばつてん！」

「姫子」

足を止め、姫子の肩を哩は掴む。長いマツゲを瞬かせ、姫子も哩を見つめる。

「あんたはまだ二年。来年がある。次がある。今の姫子の使命は来年の夏、新道寺を優勝させること。違うと？」

「でも、部長は……もう最後の夏で」

「そやね。だから、次はプロばい」

雀荘を見上げ、そこに座る目指すべき背中を見る。

「北九州最強。新道寺部長。本物のエース。そんな肩書きが通じん世界。私はそこに行く。行つて自分の力を試したい」

「……部長」

背後で車の停止音。

「残せるものは新道寺に残したい。悔いはないように。だから姫子、あんたも頑張らんしゃい」

「はい！」

「頼りにしとるよ、新部長」

世辞ではなく本心から言い、哩は姫子から身体を離す。その背中に姫子もついて来る。

いつかまた、姫子とチームを組みたいと哩は思う。今度はプロの世界で。

「——なあ姫子」

言葉にしようとしたその瞬間、背中から襲われた。

特大のカエルが張り付いてきたのかと思った。

慌てて姫子の方を向くと、大柄の男に口を押えられた彼女もまたこちらを見ていた。

「ひめっ！」

言葉は紡げなかった。気付いた時には、濡れた丸太のような腕で抱き抱えられ、口は布で塞がれた。さらに前方の路地にも車が止まり、外からの目隠しとなる。

「んんっ！」

布ずれの音と共に姫子のくぐもった悲鳴が耳に届く。

サンングラスをかけた男もう一人駆け寄り、哩の両足を掴み上げる。びっくりするほど手慣れた動きだった。あらん限りの力で足を振るが、男たちの腕はびくともしない。身体が持ち上げられる。

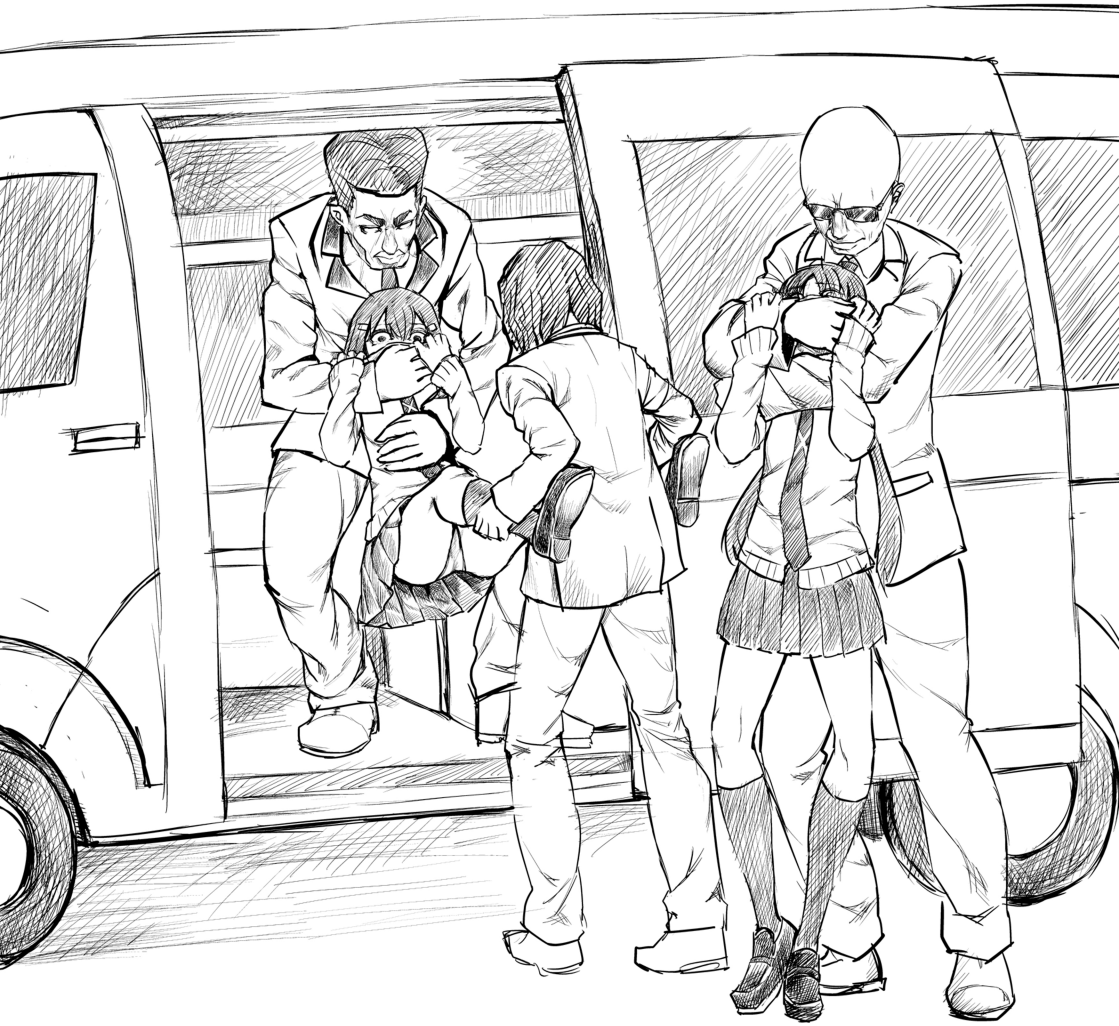
空は馬鹿みたいに青く、雀荘では変わらず麻雀が続けられている。

(野依さん——っ!!)

いつの間にかミニバンのドアが開いており、その中へと二人は担ぎ込まれた。

車は何事もなく発車する。

後には蓋の開いたペットボトルが転がるだけだった。



【第一章】

身体の痺れに哩は目を覚ます。

どれくらい時間が経ったのだろうか、ずっと同じ姿勢でいたためか手足がじんじんと痺れている。その痺れも治まらない内に哩ははっと身体を起こした。

「姫子っ!？」

息を飲み、隣で眠る姫子の服装を確認する。ネクタイは曲がり、スカートが少々ずりさがり、カーディガンに多少のほつれができていた。少し迷ったが哩は姫子のスカートの中に手を入れる。

汗。哩はその湿り気をそう判断する。

音を立てず、哩は胸を撫で下ろす。同時に姫子の腕にかかる手錠に心臓が痛んだ。

「ここは……」

八畳程度の個室だった。床も壁も打ちっぱなしのコンクリートで窓は一つも存在しない。中には二人が寝かされていた敷布団が一つつきり。他にあるのはエアコンと

思われる吹き出し口と倉庫にでも使うような分厚い金属の扉だけだ。

二人の腕には手錠。修学旅行先で見た玩具の手錠よりずっと重い。鍵穴や鎖部分には細かな傷が付いるのが妙に生々しく感じた。

「あん時……」

男たちに車に連れ込まれ、喉スプレーのようなものを口の中に入れられた。苦い味が広がったと思うと、記憶が一気に飛んでいる。

(初めから自分たちは狙われていた? でも、なして?)

扉の外に足音がした。隠れる場所もない。

哩は布団に座り、できるだけ姫子へと身を寄せる。ちょうど姫子も目を覚ましたようで、うつすらと目を開けて身を起こそうとしていた。

「部長……?」

「大丈夫。落ち着いて」

哩の言葉に姫子は静かに頷き、身を寄せる。油の足りない音を立てて扉が開き、三名の男たちがどかどかとうってくる。

「……………」

三人はホクロ一つも見逃さないと言っても言うように、じつくりと二人の身体を観察してきた。やがて中央に立っていた男が近づいてくる。

「新道寺女子の白水哩と鶴田姫子だな？」

齒に詰まるようなねちっこい声だった。

二人は頷くでもなく、否定するでもなく沈黙を通すと決めた。しばしの睨めっこ。男の眼力に哩は目を張る。

きしつ。男が笑ったかと思うと、突如として姫子の鼻先が舌で舐められた。

「いひ！」

一発だった。

意地など簡単に吹き飛び、姫子は顔を引き攣らせたまま腰から布団に倒れ込んだ。げらげらと下品な笑い声がかかる。部屋に入り、初めて人間的な反応を見せた男たちだったが、それさえも台本に書かれた演技のように思えてしまい、哩の中の不安はどんどん大きくなった。

背後に控えていた男たちが動く。腕を抱えられ、無理矢理に立たされる。腕の痛みに抗議の声を上げる間もなく、二人は扉の外へと連れ出される。

「くっ」

まずい、と哩は思う。

この先どこに連れて行かれるかはわからないが、このままではもう戻れなくなると思はなく確信する。

動くとしたら今しかない。しかし脇に腕を通されがちりと掴まれている。ラス親、テンパイ、しかし安パイなし。そんな心境で哩は周囲に視線だけを這わせる。

工場か安マンション。哩はこの場所をそう捉える。

コンクリート剥き出しの廊下にはポツポツとソファアが置かれている。壁には配電盤と思しきクリーム色の箱が一つ。天上の蛍光灯はラピットスタート式の直管。そして前方に曲がり角、ペンキで塗り潰された真っ赤な壁があり、その下には

「おい」

突然、しゃがみ込んだ哩に男が声を上げる。

「立て」

「ま、待ってくれんね。ト、トイレに」

その言葉に男たちは顔を見合わせた。

「……構うことねえ。ここでしろよ」

まさかそんな答えが来るとは思ってみなかった。だが目論み通り、男の力がだいたい緩んでいる。好色な視線で

哩の下半身を注視し、姫子への意識も薄れている。

「っ！」

それに応えるように姫子が男の腕に噛み付いた。哩は全力を持って男の頸に頭突きをかます。

「ぎっ!？」

頭が痛い。だが男の方がもつと効いたのは間違いない、腕の力が緩む。哩は駆け出す。そして壁に置いてあった消火器へと駆け寄った。

「わあああああああああああああああああつ！」

消火剤を振りまいた廊下は真っ白に染まり、咳とガラガラの声が二人を探す。哩と姫子は廊下を走る。目指すは廊下の先、ご丁寧に郵便ポストがある扉だ。

「姫子！」

「部長！」

声を掛け合い、背後から迫る声から逃げる。そしてぶつかるように扉に張り付き、シリンダーの鍵を開け二人は外へと飛び出した。

「え——」

哩が見たのは、遠のいて行く姫子の姿だった。

すぐにそれが勘違いだとわかった。開放された扉か

ら遠のいているのは哩の方だった。それを理解した瞬間、脳を焼き切るような痛みが腹部に走った。

「いぎいっつううう！」

「部長！」

姫子の声が遠い。腹部で炎が焚かれているようだった。

今まで経験したことのない痛み。それが腹の中で爆発している。姫子の声も手も振り払い、哩は床の上を駆け回る。ようやく痛みが慣れしてきた頃、哩はイモムシのように小さく身体を丸めていた。

「逃がしてんじやねぞクソ共」

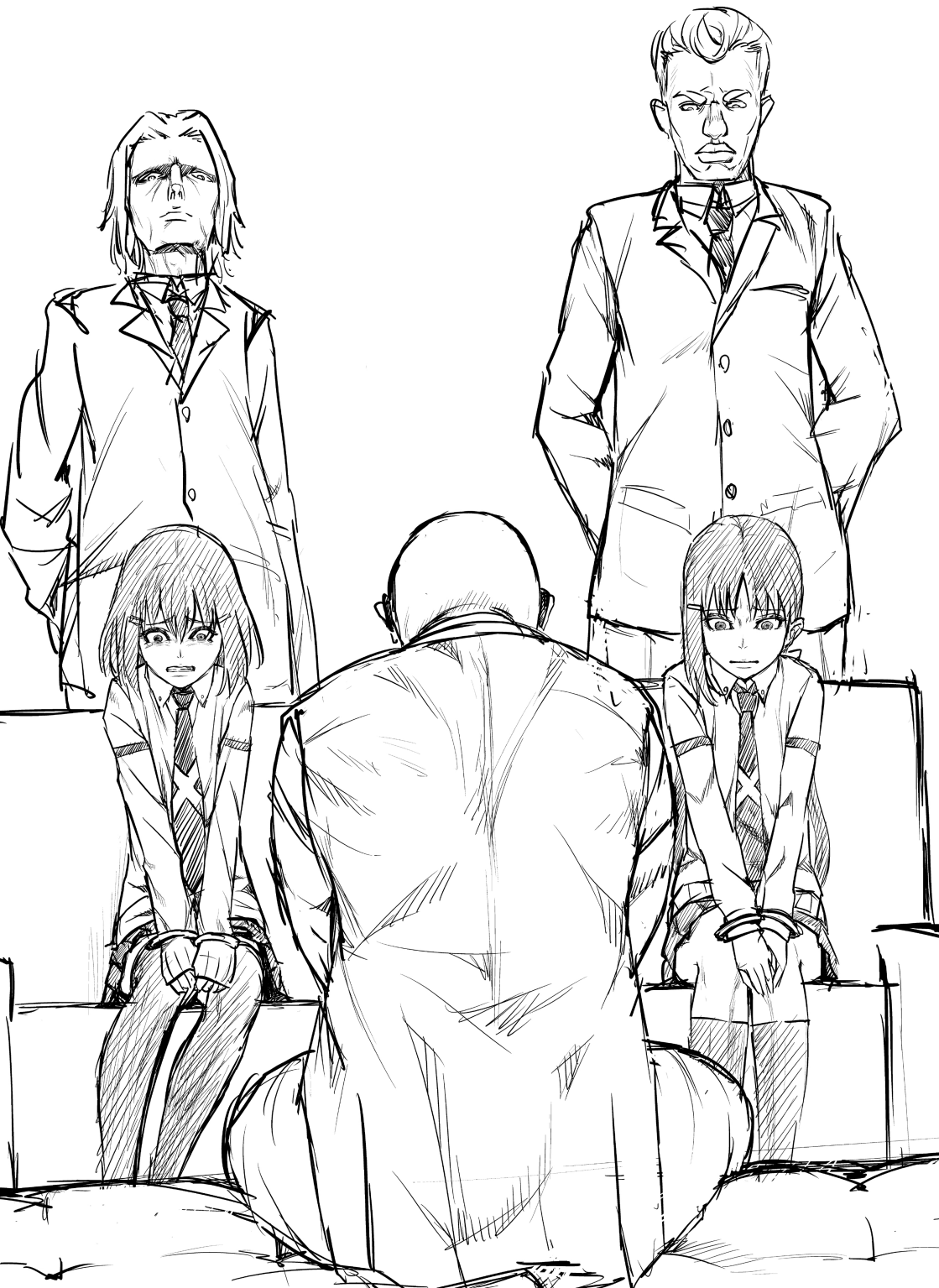
「すみません！ カノウの兄貴！」

涙で滲む視界で哩が見たのはサングラスとスキンヘッドの大男とその前で頭を垂れて命乞いをする男共だった。あれほど大きく底知れなかった男たちが、まるでネズミのように縮こまっている。

「部屋に連れてけ」

「いや、やあああああああつ!!」

男たちが髪を掴む。ぶちぶちと頭皮が裂ける感触に二人は悲鳴を上げる。扉が閉まる。蛍光灯に照らされる廊下を引きずられ、二人は奥の部屋へと連れ込まれた。



異臭がした。

それは哩が今まで嗅いだことも無い匂いだった。

二人が連れ込まれたのは広い部屋だった。団体相手の宴会でも十分に開くことができるほどのスペース。床はビニル製で、部屋の端には排水口が設けられている。天井の照明は熱いほど強く、周囲には無数のカメラ。奥の壁には黒いマットが三枚も立てかけられており、その横には用途も知れない道具が散乱し、部屋の中央には雀卓があった。

「座れ」

ソファが部屋に運び込まれ、スキンヘッドの男がそこにどかりと腰掛ける。哩と姫子は男の前に座らせられると、今度は足にも枷を付けられた。そして、男たちに何か冷たい物を首に当てられる。

「俺の名前はカノウ。お前たちの主人となる男だ。俺を呼ぶ時は主人様と呼べ。それ以外には認めない。わかっただ。さあ、言え。俺は誰だ？」

言うはずがない。哩と姫子は沈黙でもって応える。

それを受け、カノウが二人の背後に目くばせする。

カチツ。百円ライターのような音がした。

「——っ！ ひぎいいいいいいいいいいっ！」

「——っ！ ぐひいいいいいいいいいいいいっ！」

我慢するとかしないとかいう話ではなかった。全身の神経を引き抜かれたような激痛に、二人はあつという間に悶絶する。

「電気つてのは便利だよなあ」

まるで他人事のようにカノウが言う。

「神経を直接刺激するから我慢も慣れもできやしねえ。躰のなつてねえ犬を扱うならコイツが一番だ。電流を絞りし、流す時間が調節すりゃあ痕も残らないしな。見た目をそのまま残して調教するにゃあ良い道具だ」

「が……っ！ かは……っ！」

唇がうまく動かない。閉じられなくなった口からは涎が垂れ、ビニルの床に白い滝を作る。

「俺は誰だ？」

質問される。

答えなければならぬ。そう思うのに、口がまだ思う



ように動かない。

背後で死神の足音を聞いた。

カチッ。

「あぎやああああああああっ！」

「あははうわああああああっ！」

痛みは一秒にも満たない一瞬だ。だからこそ狂うこともできない。

「俺は誰だ？」

「い、い、いああああああああっ！」

哩の身体が魚のように跳ねる。

じやりじやりと手錠を鳴らし苦痛を和らげようとする

も、そこにさらに電撃が加えられる。

「俺は誰だ？」

「俺は誰だ？」

「俺は誰だ？」

繰り返される問いかけと電撃。

ようやくそれから解放された時、二人の下には黄色い

水溜りが広がっていた。

「……………あ……………あい……………」

目、鼻、口。見開かれた穴から体液を垂れ流し、哩と

姫子は潰された虫のように震えている。

「ひっ！」

ソファアの軋み一つに身を震わせ、二人は眼球が飛び出さんばかりに目を見張る。

カノウが立ち上がった。

それだけで哩は子犬のような声を上げる。

「俺は誰だ？」

今まで知りもしなかった人間の『雄』という存在。

途轍もなかった。哩の中にあつた反抗の意志などあつという間に砕けてしまった。それでも哩は最後の最後で踏みとどまっていた。

言葉は力だ。もし自らの口でそれを言ってしまうと、それが真実になってしまう。

唇を噛み震えを押し殺して、哩はカノウを睨む。

周囲からわずかなざわめきが起きた。

「ほう。まだそんな顔ができるたなあ。大したタマだよ。」

普通はもう心を折られているもんだが」

「ぐっ！」

カノウは哩の髪を掴み上げる。そしてその顔に吹きか

けるように鼻を鳴らした。

けるように鼻を鳴らした。



「その根性に免じてチャンスやる」

「……え？」

まだ痛む身体を引き起こされ、雀卓へと連れられる。

ごく普通の全自動タイプの麻雀卓だ。その椅子へと二人は座らせられた。対面にはカノウともう一人男が座る。

「お前たちはインターハイまで行つた腕利きなんだろう？ その土俵で戦つてやるよ」

胸元からタバコを取り出しカノウは火を点ける。

馬鹿みたいに分厚い胸板が上下すると、タバコ半分近く燃え尽きた。

「半荘二回の勝負。もしお前たちの二人のうち、どちらでも良い、一回でもトップを取れば解放してやる」

手錠が外される。久々に戻つた手足の感覚に少しだけ安心してしまう。だが、すぐに啞は自分の心を改めた。

これだけ暴力に訴えてきた相手がこんな都合の良い話を持ち出すはずがないのだ。

「……なんばさせるつもり？」

「はっ！」

嬉しそうにカノウは頬を歪め、部下に一抱えある箱を持つてこさせる。

「麻雀風俗つてのを知っているか？」

知っているはずがない。

「麻雀をする女つてのは裏でも人気があつてな、特にお前たちみたいな学生雀士は高値がつく。これはそこでやつてる麻雀だ。通常とは違い、特別ルールがある」

「特別……ルール？」

「もし女が失点したらここからカードを引く」

カノウは箱の上に開けている穴に手を突っ込み、中から一枚のカードを引いて見せる。ラメ加工でもされているのかそのカードの背面はやたらに煌びやかだった。

「そして、カードに書いてあることには絶対に従つて貰う。拒否権はねえ」

にやにやと周囲の男が笑う。その反応を見るまでもなくロクでもない内容なのは間違いない。

「直撃を受けた場合、その時はちよいと違う。せつかく直撃を取つたんだ、より過激なコトをさせたいだろ？ だから専用の箱を用意してある」

男がもう一つ、箱を持って来る。先ほどの箱より一回り小さいが、よりケバケバしい色合いの装飾から《いかにも》な雰囲気を感じさせる箱だ。

「これがなかなか好評でな、じわじわと責める奴も居れば、好みの女を直撃し続ける奴もいる。あるいは全員を一気に飛ばしたりな。女にケツを舐めさせる前の余興にはちようどいいのさ。先に言っておくが、打牌は三十秒以内だ。それを越えたら問答無用で脱落だ」

三十秒。麻雀の持ち時間としては長すぎるくらいだ。

「……部長」

不安げに姫子がこちらを伺う。

当然、臭いのは唾も感じている。こんな勝負を正々堂々挑むなら最初から拉致などしてないはずだ。ならばカノウたちの目的は一つ、新道寺女子麻雀部というプライドを完膚なきまでに破壊し辱める事。

（上等と！）

麻雀という舞台に立ち、唾の反骨心は勢いを取り戻していた。暴力では勝てない。だが麻雀ならばこんな連中に負けるはずがない。

（姫子と、みんなと築いてきよったこの数年間！ こぎ

ゃん奴らに負けはせん！）

憔悴した表情に力が戻る。それに呼応し、姫子もまた顔を引き締める。

「良い顔だ。さあて始めるか」

「……約束は」

「守るさ。お前らが勝てればな」

雀卓のスイッチが入る。牌が投入され、再び台に並べられる。

「さあて、んじやいくとするか。親はお前でいいぜ」

姫子を指さし、カノウは両手を鳴らす。

「姫子」

「だ、大丈夫です。勝って、勝って帰りましよ部長！」

「——ああ！」

唾と姫子の運命を決める闘牌が始まった。



（……ここまでは順調）

一局目、手なりに進めるうちに唾はテンパイした。

役はピンフドラ1。安手だ。

（普通ならこつからタンヤオも目指す。ばってん、トツプば取ればよかなら速力を活かして和了もあり、か。得点は少なくとも逃げ切れば——）

突然、腹の中で石が転がる。

言いようのない不安。何かを見落としている。だがその正体が掴めない。一体何を、

「三十秒経つぜ？」

「……う」

急かされ、哩はタンヤオへと手を進めた。

牌に顔を向けながら視線だけをカノウと男へと向ける
正直、腕は大したものではないと感じていた。

カノウはまだ油断ならないと思うが、もう一人の男は捨て牌から手が透けて見えるほど単純な打牌をしている。
インターハイの怪物たちを相手にしてきた哩と姫子なら十中八九勝てる相手だ。

しかし、どうしても不安がぬぐえない。

（相手は強いわけじゃなか。ばってんこの麻雀は普通とは違う。なにか——）

「ツモ！」

思案の海に居た哩の耳に、姫子の声が届く。

見れば姫子が手を公開していた。

「ほお。安手で逃げ切りか。ま、親だしな」

素直に感心したようにカノウが言う。姫子はほっと胸

を撫で下ろしていた。しかし、周囲の男たちの笑みが深くなったのを哩は見逃さなかった。

（……っ！ しまつ！）

気づいた時にはもう遅い。カノウの傍に箱を持った男が歩み寄っていた。

慌てて姫子が立ち上がる。

「ちよっ、なして!？」

「ルール違反はしていない。カードを引くのは失点した時、だ。これには当然ツモ和了も含まれる」

はっ、と気づき姫子が眉を寄せて哩を見る。

「す、すみません部長！」

「……よかよ姫子。親での連荘。これは良い流れと」

言いながらも哩の視線はカノウと箱に釘付けた。全くの前情報なしの罰ゲーム。一体どんなことをやらされるのか……。

「引くぜ」

野太い腕が箱に突っ込まれる。がさがさと探る音は哩の反応を楽しんでいるように長く続けられた。

やがて一枚のカードが箱から取り出された。その文面を見てカノウはくくくつとわざとらしく笑う。

「ほらよ」

哩へとカードが投げて寄せられる。

周囲の淀んだ空気に似つかわしくないポップなイラストと共に書かれていたのは『穴あけ』という文字。

「つーわけだ。おいお前ら！」

「へい！」

哩の身体が持ち上げられ、有無を言わず床に伏せさせられる。

「な、なにすつと!？」

「決まってるだろ？ この可愛い制服に穴を開けるのさ。お前の恥ずかしい部分が良く見えるようになあ！」

「なっ！」

抗議の声を上げようとする哩の額に、黒い棒が突き付けられる。実際に見るのはこれが初めてだ。だが肌に完実冷たさは間違えようがない。これこそが哩と姫子を悶絶させた電撃の正体だ。

「動くなよ。またコイツが欲しいか？」

「——うっ！」

動けない。身体中を走る痛みが脳裏にフラッシュバックし、哩は途端に石になった。

「よーしよし、良い子ちゃんね〜」

ハサミの先が布地を切り裂き、スカートとブラウスに穴を開ける。邪魔だから、という理由で下着は奪われ、ぼつかりと開けられた円形の穴からは哩の股間と乳房が丸見えとなってしまう。

「良い格好になったな。哩。ツンとした顔に良く似合っているぜ」

「う……っ」

呼び捨てにされたことも哩の頭の中には入ってこない。十人あまりの成人男性の前で恥部を晒してしまっているという状況は、成人前の女子にはあまりにも現実から逸脱し過ぎていた。

両手で隠そうにもその穴は大きく隠しきれぬものではない。むしろ隠そうと足掻く反応こそ男たちの情欲を煽ってしまふ。

「続きだ。座れ」

ぐっ、と目の周りに力を込め、哩は腕を組むようにして席へと着いた。

「部長……私……私……」

「気にせんと。この程度、なんてことなか」

両手を握りしめ顔を伏せる姫子に、哩は軽く笑いかけ
てみせる。

「さて、姫子の連荘だな」

「う……」

姫子は点棒を置き、再び配牌が行われる。

(く……つ)

ヤマに手を伸ばすたび、好色そうな視線が集まるのが
わかる。牌を揃えるにも片手では限界があり、どうして
も両手を使うしかない時には哩はその乳房を露出させざ
るを得なかった。

「見ろよ、なかなか……」

「俺はもつと巨乳の方がいいな。原村みたいな」

「いやいやあの位の方が感度は良いもんだぜ」

外野から飛ばされる下種な感想。その言葉にどうにも
哩は心乱されてしまう。

(こんな所、姫子にしか見せたことなかに)

周囲の視線と声、姫子への申し訳なき、それに失点の
プレッシャー。それらに歯噛みしながらも哩は打牌を続
ける。

(張った……けど)

混一色。ドラも絡めて満貫は確定している。
男たちを哩は睨む。

この麻雀は予想以上に絡め取られたものだった。

仲間を思えばツモ和了はできない。しかし流局しても

ノーテン罰符で失点すれば同じ事。

ベストなのは彼らから直撃を取り続けることだ。

稼いだ点でトップを攫い、どちらかを飛ばせばそこで

半荘は終了。これ以上の恥辱は味合わずに済む。

しかしそれが成し辛いのは哩も良く知っている。麻雀

には運が絡む。失点せず特定の相手から直撃を取り続け
るなど神業にも等しい。

(白糸台の弘世董なら容易いかもしれんばってん、私に
はそんな芸当は)

牌をツモる。来たのは哩の和了牌だった。

(くっ！)

普段ならば当然和了するところだ。

だが、もしこの牌で和了ってしまったら姫子の点も奪つ
てしまう。

歯噛みし、哩はツモ牌を卓へと打つ。

姫子を犠牲にはできない以上、か細い道としても狙う



は直撃ただ一つ。

「ロン」

「……あ」

願いはあっさり打ち破られた。

「そいつ出るとはな、お前の待ちだと思ってたぜ」

颯のようにカノウは言う。

だがそれさえも唝は聞いていなかった。

（直撃……っ！）

カノウの捨て牌を見ればキナ臭いのは明らかだった。

普段の唝ならば決して見過ごすことなどなかっただろう。

寒くも無いのにカチカチと奥歯が鳴る。

「さて、どのカードが……ほお」

投げて寄せられるカードはギロチンの刃も同じだった。

（あれ？ これ、なんて読むんやったかな？）

薄い膜が張られたように意識がぼやける。唝の中から

は椅子の感覚が消え、日本語が認識できなくなっていた。

「ひ……っ！」

姫子の声にわずかに意識が戻る。

いつの間にか卓の上に木製の箱が置かれていた。その中にはピンク色をした不思議な道具が重なり合っている。

精子みたいな形だ、と唝は思う。

カードに書かれていたのは『ローター』だった。

「ちようどいい感じに露出してゐるな。やれ」

「やつ！？」

はっ、と気づき手足を振るも万力のような力で手足を

掴まれる。唝の胸に手が伸びる。ぬめぬめとした男の指

先が乳房に触れ、唝は発狂したように叫んだ。

びたりと電極が肌に押し付けられる。

「あぎやああああああああつ！」

「抵抗すんなよ。素直にしてりや気持ち良くさせてやる

んだからよ」

ビビッとテープを千切る音と共に唝の胸には、乳首を

挟むようにそれぞれ二つのローターが固定された。

「うあ……う」

まるでSF映画で見た寄生虫だった。今にもそのなか

ら怖気立つ化け物が生まれ出るのはないかと思う。

「呆けてるんじやねえよ。次は下の口だ」

「え……？ きやあつ！？」

両足を抑えていた男が足首を持ったまま立ち上がる。

唝の姿勢は盛大な股っ開きとなり、下着で隠していた



若々しい股間も丸見えとなつてしまふ。

「やつ、やあつ！」

「暴れんなつて食いつきやしねえよ」

「そうだけ、食うのは俺たちの方だ」

下品なジョークを飛ばしながら、哩の股間に透明なロ
ーションを垂らす。

「ひっ！」

男の指がそれを広げる。小さ目の茂みが露で濡れ、強
い照明にさらさらと輝く。

さらに、哩の目の前で一人の男が指先にローションを
垂らした。ゆっくりと哩の股間へと向かう男の指に哩は
裂くような声を上げる。

「うわ！ うわあああああつ！」

つぶつ。

哩の秘所に男の指が侵入する。節くれだつた指がごり
ごりと膣口を擦り、哩の中に粘液を塗り込んでいく。

「こつちがお留守だけ」

「あつ……なつ！」

指を濡らした男がもう一人、哩の下半身へと屈み込ん
でいた。舐めるようなその視線の先にあるものに、哩は

ぐらりと地面が揺れるのを感じる。

（う、嘘やろ？ ま、まさかそつちも——！？）

ぐぼつ。

毛深い指が哩の尻へと沈み込む。

「ひぎい！」

秘所とアナル、二つの穴に男の指が深く突き込まれる。

（そんな——こんなん——姫子にだつて——っ！！）

ぐちゅ！ ちゅ！ ぐちゅ！

ローションが泡立ち卑猥な音を立てる。

哩はそれをどこか遠くの出来事のように聞いていた。

「ひ、卑怯と！ こんなんカードには！」

勇気を振り絞り声を上げた姫子に、男たちが胡乱気な
視線を送る。

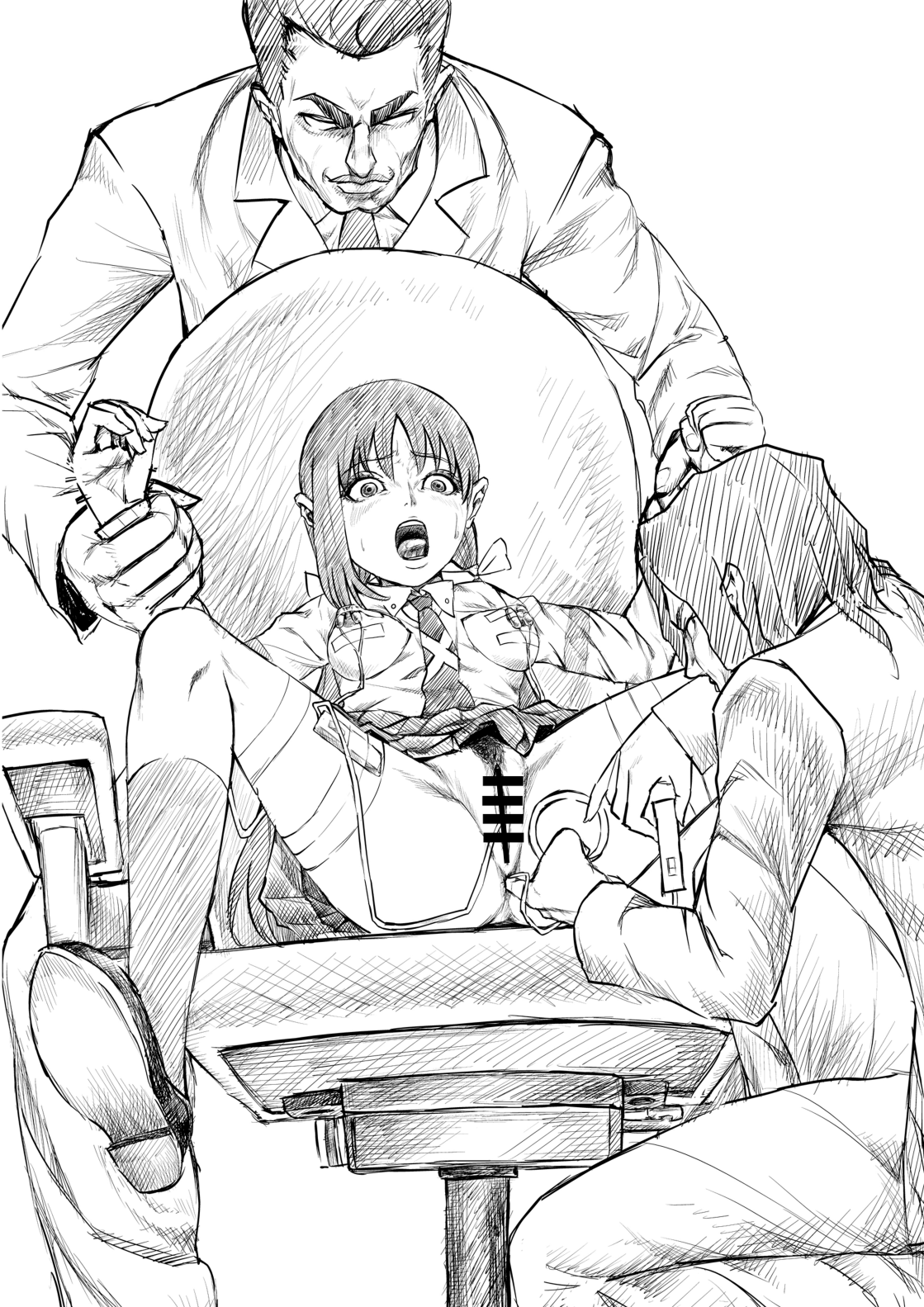
「ああん？ 濡らさずに入れちゃ痛いと思つてやつてん
だよ？ 善意だけ善意」

「それとも姫子ちゃんはそのちの方が好みだつたか？」

「ひひひっ！ 本当、姫子ちゃんはツイてるよなあ！

哩ちゃんにばつつか損な役を押し付けて自分はまだ無事な
んだから！」

「本当は最初からそのつもりだつたんじゃねえか？」



「そ、そんな……私は！」

「ふいん！」

二本の指が好き放題の中指を動き回る。生理反応により股間からは愛液と腸液が漏れ出し、太ももを流れて椅子を濡らす。

「さあて、このくらいいいかな」

ぬぼお……っ。

粘っこい音を立てて男たちの指が引き抜かれる。散々に踏みじられた秘所とアナルははくはくと蠢き、まるで恋しそうに震えていた。

「これだけ濡れてりやローターにローションはいらねえなあ」

「哩ちゃんも結構良かったんじゃないの？　こんなトロトロにさせて」

「だ、誰があ……あひん！」

その反抗の口を塞ぐように、ピンクローターが哩の中に押し込まれる。膣に二つ、アナルに二つ。さらにクリトリスを挟み二つのローターが装着される。

「最初は手加減してやるよ、哩ちゃん」

ローターから伸びるリモコンを哩の太ももに貼付け、男たちはそのスイッチを『弱』へと設定した。

だが合計十個に及ぶローターのフルコースだ。

振動は弱いとはいえ、哩はそれだけで息も絶え絶えであった。

「良かったな哩。一番軽いカードで」

「……え？」

思わずマヌケな声を出してしまう。哩の脳みそが理解を放棄していた。

一番軽い？

これで？

「どうした呆けた顔をして。その程度でギブアップか？　まあ、俺の事を主人と認めるなら可愛がってやるぞ？」

「だ、誰がっ……あんっ！」

歯を食いしばり、哩は雀卓に手をつく。だがその手は誰が見ても同様に震えている。それでも哩は意地で乳房を隠し、牌を卓の中へと入れる。

「結構だ」

洗牌、そして配牌。

よるめく手で哩は牌を広げる。その間にも胸と股間の

ローターは癒えぬ刺激を喰へ与えてくる。最初は痛みと
もくすぐったさとも思えたそれが、時間と共に堪えきれ
ないもどかしさになってゆく。

ぶるりと股を震わせながらも喰は打牌を続ける。

どこからか冷やかしの口笛が鳴った。

（私の親番……連荘で飛ばしてしまえばこれで終い……
でも、も、もしかまた失点したら）

カノウの言葉が岩となり喰の頭を打つ。

これで一番軽いというならば、他にはどんなことが書
かれているのか、もはや喰の知識では想像もつかない。
もう一度、直撃を受けたら自分はそれに耐えられるだろ
うか。耐えられたとしてもその次はどうだ。さらにその
次は。

ぶるりと肩が震える。

怖い。

喰の中で想像の悪鬼が我が物顔で肥大化し、男たちの
一動が全て恐ろしい畏に見えてくる。

だが喰の中の冷静な部分は、未だに勝利の方法を追い
求めていた。そして、ある答えに辿り着く。

コンビ打ち。

トップを取り、なおかつ半荘を速攻で終わらせる方法。

四人のうち二人は身内なのだから、一人に点数を集め、
もう一人が有効牌を放流して早々に飛んでしまえばいい。

麻雀において特定の相手を直撃するのは成し難いが、
仲間が有利になるよう動くのは遥かに容易い。恐らく、
現状行える最も確実でスピーディーな解決方法だろう。

しかし、そこに立ちはだかるものがある。言うまでも
ない、『特別ルール』の存在だ。

役満の直撃を受けたとしても最低一回、満貫であって
現在の点数からは三回の失点が必要となる。

あの恥辱と苦痛をくぐり抜けなければならない。

その事実が喰の思考に暗い影を落とす。

「おい」

「っ！」

カノウの声に慌てて牌を切る。周りからやれやれとい
う野次が湧いた。

「しつかりしろよ喰ちゃん。打牌時間が過ぎたら脱落だ
ぜえ？」

「まあ喰ちゃんがそうしたいならいいけどさ！」

「ローターパーティーで盛ってるんだろ！俺たちの所に

早く来たいんだとさ！」

下卑た笑い声に顔が赤く染まる。

とにかく今は集中しなければならぬ。こんなことで
はまた足をすくわれてしまう。それはわかっている。だ
が、考えを止められない。

もし——、飛ばすとするなら、それは

(……姫子の方が)

哩の思考に冷たい剣が入り込む。

現在の親は哩だ。もしここで姫子が差し込みをしてく
れば哩の連荘が始まる。親と子では親の得点が高くな
るのはルールに明記された自明の話だ。

無論、姫子には何度かカードの洗札を受けて貰うこと
になるだろう。それは仕方ない。それに、

(姫子はまだ、なんも受けていない)

哩が服に穴を開けられ、最も恥ずかしい所を蹂躪され、
冷たい玩具に弄ばれているというのに、姫子は未だ何の
辱めを受けていない。

余力があるとすれば姫子。それは間違いない。

ならばこの状況で、辱めを受けるべきなのは

(——ち、違とやろ!?)

自らの脳裏に浮かんだ考えを哩は意志の力でねじ切る。

哩が考えた手段。それは姫子をこの男たちに売り払う
も同じことだった。本来ならば検討するまでもなく却下
していた、否、考え付きさえしなかったおぞましい解決
法。それを曲がりなりにも可能かどうかなどと思慮して
しまった事実。その事実が哩を責めてたてる。

(私が大事ななんはなんと!?) 姫子に辛い思いをさせて、
こいつらに辱められて、それを私は許せると!?)

許せない。

許せるわけがない。

(飛ばすならこいつら! 私は絶対に姫子を犠牲にはせ
んっ!)

ぐつと身体に力を入れる。だがそれは股間のローター
を締め付けると同意義だった。

「んきゅう!」

反射的に身体が跳ねた。気をやりかけた身体を静め、
哩は涙に滲んだ眼を開く。

「和了か」

「……え?」

視界情報が脳内に届く。

姫子は牌を置いた姿勢のまま固まり、信じられないものを見るように呟を見つめている。男たちは少々驚いたような真顔。その中で、カノウだけは意地悪い鮫のように笑みながら卓上を指さしていた。

右手。

手配が倒れていた。

「白のみか。だが直撃は直撃だな」

姫子の顔が歪んでゆく。信頼を裏切られた犬の表情だ。

この時、姫子もまた呟と同じ考えに至っていた。呟を犠牲にはできない。そして自分も犠牲にはならない。倒すべき相手を倒し、ここから抜け出す。そして、呟もまた同じ考えであると信じて危険牌を打ち出した。

だというのに、

「部長……なして」

「ちが！ これは！」

「姫子の方を飛ばす手か。ま、そういうのもアリだ」

呟の弁明を断ち切るようにカノウが言葉をはさむ。

「だが、身内を売るとはなあ」

「ちが、違うと！ 違う！」

そこでカノウの表情に冷酷さが帯びられる。

「なら——、見せ牌か？」

サングラスの下に潜む獯猛さ。それが少し匂っただけで呟は言葉を失い、全身から汗が噴き出した。

「張りつめたギャンブルの坩堝。身を焼くような雀卓の席に座っていると、時々クソみてえな輩が出てくる。わざと牌を倒して仲間に手を知らせたり、な。そういう奴を俺は許さない」

金属みたいな音を立て、カノウは奥歯を噛み合わせる。いつしか周囲の男たちからも笑みが消え、嵐が過ぎ去るのを待つ兎のように黙りこくっていた。

「指一本、それが掟破りの代価だ」

脅し、などであるはずもない。

拒絶を許さぬ必定。

カノウが定め、カノウが執行する絶対の法。それは必ず遂行され、呟の手から指を奪うだろう。

「答えろ。その手、見せ牌か？ 和了か？」

照明の熱さもローターの責めも、そして姫子の存在さえも呟の中から遠く離れて行く。

ココロのひび割れを呟は聞いた。

部屋に運び込まれたそれを見て、姫子は呆然と呟いた。

「なん……これ」

呟も感想は同じだった。

男たちが持つてきた重厚な椅子。座った者を決して逃がさないよう設計されたそれは、拷問器具の『審問椅子』を連想させた。

だがその椅子が持つのは被告を突き刺す針ではない。

凶悪なイボの並んだ張り型が二本。それが腰掛け部分からそそり立っている。

『マシンバイブ』

それが姫子に背負わされたペナルティだった。

「姫子ちゃんも、可哀想になあ。こいつ、結構エグいぜ？

気持ち良すぎて昇天しちゃまわらないよにな」

「実際、心臓止まっちゃまった奴もいるからよ、姫子ちゃんはそのならないようしつかり気を持つんだぜ」

「失神しながらもイキまくってた女も居たよな！ ありやあ凄かったわ」

男の一人が椅子の背後のスイッチを入れる。まるで意志があるかのように模造の男性器はひねりを加えながら動き出す。生理的嫌悪を催させる悪魔的その動きに、顔

を青ざめさせながら姫子が後ずさる。

「ぶ、ぶちよお……」

助けを求めるような視線を呟は受け止めることができなかった。今この場において呟はただ無力だ。

「姫子ちゃんも頑張るんだし、呟ちゃんも頑張ろうね」薄っぺらい励ましに隠した淫猥な男の言葉と共に、ローターを強められた呟は椅子から一歩も動けなくなっていた。

だが仮に何もされていなかったとしても、姫子を守りにいったかどうか呟にはもうわからなくなっていた。

「む、無理……こんな無理い……っ」

「決まりは守って貰う。おい」

「へい！」

「ひっつ！ やああああああああああっ！」

男たちに手足を取られ、姫子は先ほど呟がされたような開脚の姿勢を取られる。スカートはまくり上げられ、子供じみた股間も丸出しにされた。

「舐める」

泣く暇も与えず、カノウの中指が姫子の目の前に突き出された。巨木の根を思わせる指先は、姫子が逃げる事のできない運命として目の前にある。

深呼吸を三回、それが姫子が運命を受け入れるのにかかった時間だった。

「……………んちゅつ」

小さな赤い舌を伸ばし、姫子はカノウの指先を舐める。カノウの中指のささくれに味膏を這わし、爪垢を舐め取る。透明な唾液が水飴のように流れ、指間から垂れて落ちる。

「しゃぶれ」

「ふ……………」

今度は深呼吸一回だった。

「……………姫子……………」

姫子の口の中に指が飲み込まれてゆく。赤い唇が毛深い関節の上を滑り、口端から溢れた唾液が線を引きく。

(姫子の口が……………舌……………唇……………)

今まで他の誰かに姫子の口を許したことはなかった。あそこは自分だけの物だった。姫子と自分だけの秘密の場所。姫子の唾液の味も、舌の柔らかさも、奥歯の感触も、知るの自分ひとりだった。

なのに、今は武骨な指と交わっている。

「うぶっ！」

さらに人差し指と薬指が入れられた。太い指を三本啜えるのはさすがに苦しいのか、鼻息を荒くつきながらカノウを上目遣いに見る。

そんなことはお構いなしに、カノウは姫子の頭を掴み激しく前後させる。姫子の気持ちも負担も全く考えない、道具を扱うかのような所業。

喉を突かれた姫子は少女にあるまじき嗚咽を上げ、目尻に涙を浮かべる。

「あ……………はああ……………」

姫子の口からどろどろとなった指が引き抜かれる。それはそのまま呆けた姫子の股間へと伸ばされ、ぴっちり閉じられた肉花へとあてがわれた。

「ああ……………はあああ……………っ！」

唾液でたつぷりと濡らされた指が、狭い膣口をこじ開けて肉を割り進む。だが唾は気付いていた。指が触れるよりも前に、すでに姫子の秘所は濡れていたことに。

「あ……………んう！ はああん！」

「力を抜け。俺を受け入れるんだよ」

乱暴な、しかし確かな技術を持って動かされる指先。頑なだったのは一瞬で、指が往復するたびに姫子のそこ

はカノウの指に合わせて開閉を繰り返すようになっていった。姫子自身の声にも苦悶の中に、甘い雌の響きが混じり始める。

感じている。

思いはどうあれ、姫子の身体はカノウの指に快感を覚えていくのだ。

「はぐうううう！」

臍に中指を入れたまま、姫子のアナルに親指を突き込むカノウ。声に甘い味を増し、ぐちゅぐちゅと卑猥な水音が唝の耳を責める。

（こんな声……何回聞いたことがあるのかな？）

自問が唝を蝕む。

十分な下準備をして一晚かけて愛し合い、ようやく聞いた姫子の素直な喘ぎ。それをこの男はほんのわずかな時間で、しかも腕一本で成しているのだ。

その事実が身を裂くほど悔しい。

（でも）

唝は顔を伏せつつも、姫子の股間から目を離せなくなっていた。同時に感じるどうしようもない切なさ。強められたローターが不思議と大したことの無い玩具に思え

てくる。

（——気持ち良かかな）

自然と湧き上がるように、その感情は唝の中に生れ出ていた。

（わ、私は、なにを……っ！）

爪先がめり込むほど太ももをひつかき、唝は己の感情を押し殺す。あつてはいけない。こんな感情は身を滅ぼす猛毒だ。そう頭ではわかっている。それでも唝は姫子とカノウから目を離すことができないでいる。

「こんなもんか」

「あ……あひい……い」

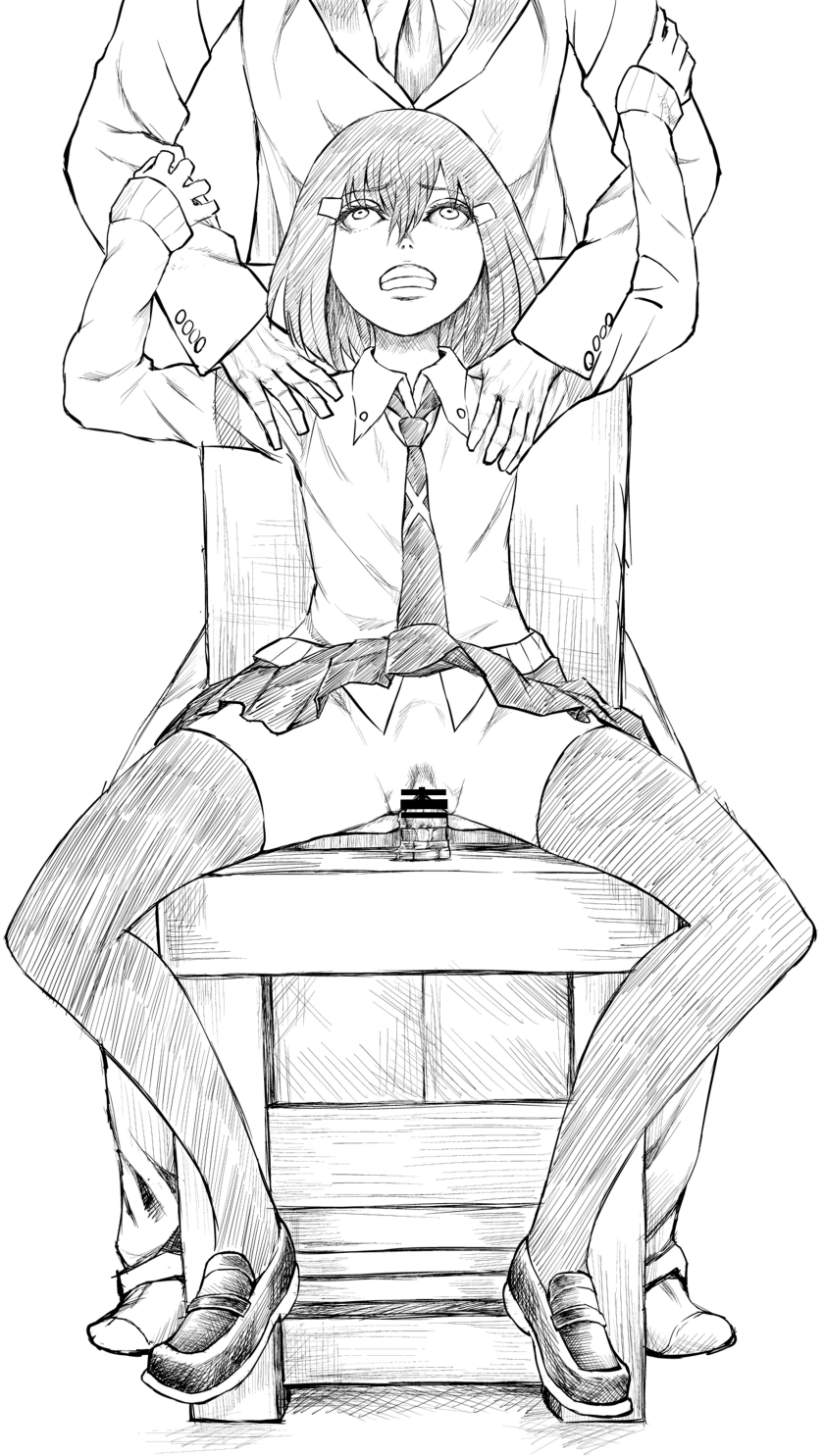
カノウが腕を引くと姫子の秘所はイヤイヤと言うように肉を締め付けた。強引に指を抜くと、姫子はぷしゅつと透明な液を噴いた。

「よつと」

「はは、姫子ちゃんもうできあがってるねえ」

二人の男が両脇から姫子を抱えて持ち上げる。そしてバイブイスの直上へと運ぶと位置を調節しながら、ゆつくりと身体を降ろしていく。

「はあ……はふああああ……っ」



息が押し出されるように姫子の口から吐息が漏れる。

あれだけ無理と言っていたバイブが、見る間に姫子の中に飲まれてゆく。凶悪な造形を呈していたそれは、姫子のために作られたかのように膣内にびたりと収まった。

「入ったじゃねえか姫子。お前が考えているよりも女の身体は無理がきくんだよ」

「あ、ああ……嘘……嘘とお……」

バイブの形に膨らんだ自らの腹を見て、姫子は夢見の中のようにつぶやく。やがてスイッチが入られ、バイブが上下運動を始めるとその声は悲鳴にも笑い声にも似た者へと変わってゆく。

ローターとバイブ、それぞれおの道具で責め立てられる二人を眺めて、カノウは鼻を鳴らしてタバコに火を点けた。

「お前らがどう思おうが、所詮は女は男に屈服して喜ぶように生まれ出ているんだよ」

「そ、そんなこと……っ！」

「お前らは『雌』なんだよ」

反論しようと口を開いた哩を一蹴し、カノウは二人を

見つめる。その視線に哩も姫子も言うべき言葉を失くしてしまった。

「雄に跪き奉仕する『雌』。「遊び」「交わり」「生む」。それが女の価値の全てだ。それ以外には何もねえ。より強い雄に支配され服従することこそが女の本懐であり存在価値なんだよ。わかったか『雌』共」

「そ、それは……」

「姫子のこと随分羨ましいそうに見てたな、哩」

「っ!？」

『雌』はどんな雄に服従すればいいのかがわかるのさ。フェロモンだ遺伝子だ小難しい理屈は抜きの本能でな。

そして俺も雄としてお前らを『雌』にすることを決めた」
タバコを捻じり消し、カノウは顔中に皺を作って笑んで見せた。獲物を狙う獣の顔だった。

「抗えねえよ。お前らもな」



哩の連荘は、あっさりと流局した。

哩と姫子はテンパイ。辛くも失点を逃れる。だがその

間にもローターとパイプの責めは続き、二人の集中力は滑石のごとく脆くなっていた。

続く男の親。

哩はここで白と中を対子で持つという運に恵まれた。だが、カノウが早々にリーチをかけた途端、その勢いは崩れた。

終わってみれば、カノウのリーチに皆が安牌を回した結果、誰も和了することなく流局するという有り触れた流れでこの局は終わった。

だが、ノーテンであった二人は罰符を受けることとなる。引かれたカードは『ディーブキス』だった。

「んくっ……ちゅっ」

「どうした。すっかり舌を入れねえと終わらねえぞ」

ソファーに陣取り、哩と姫子を左右に侍らせたカノウ。

一時的にパイプの苦しみから解放されたことを喜ぶまもなく、乱雑に、しかし熟練した手腕で姫子の唇をカノウは奪った。激しいついでにばみを繰り返す二人を哩は直視できなかった。

「次は哩だ。顔向けろ」

「……う！」

ぐいと顔を寄せられ哩は顔を歪める。

女性とはまるで違う体臭。汗とヤニの匂いにどうしようもなく男という存在を意識させられる。顔にかかるカノウの鼻息に頭がくらくらする。姫子の唇を奪った口が、軟体生物のように蠢いている。

「うん！ ふううううっ」

強引で力強くカノウが唇を押し付ける。女性のもものりも遥かに固く荒れくれたそれに痛みさえ覚える。

(臭っ……息、苦し……っ！)

カノウは自ら舌を入れようとはしなかった。自らの意志で奉仕しろと言うのだろう。底意地の悪いやり方ではあるが、カードの命令通り舌を絡めたキスをしなければ、カノウは永遠に口を離さないだろう。

とにかく、終わらせなければならなかった。

「う……ふう……」

カノウの胸に手を置くと、その胸板の厚さに驚いた。

新道寺は女子○だ。故に男子の身体に触れると機会はあまりないが、それでもこの身体が世間一般的な男性とはかけ離れていることはわかる。

古代ギリシヤの彫像かはたまた仁王の仏像か。

そんな芸術作品としてでしか知らない肉と、哩は触れ合っていた。

舌を入れる。

ただそれだけの行為に、哩は凄まじい背徳感を覚えていた。自他の枠組みを超えて交わるといふ行為。それを自らが行っていることをどうしても意識させられる。

カノウの口の中は粘っこい唾液で溢れていた。舌は異形のエイリアンを思わせ、固い歯に食いつかれないかと背筋が緊張する。その中に甘い味が混じっていた。

姫子の味だった。

「最後は二人でやってもらおうか」

「く……う」

口を半開きに、二人を待つカノウ。

当然、そんなことを要求する権利などない。ディーブ

キスは既に終了しているのだから。

だが権利はなくとも道理はある。哩と姫子はこの男に逆らえないという絶対的な道理が。

「あ……、んちゅ……」

「は、はむ……ちゅちゅつ」

カノウの身体に寄り添い、舌を伸ばしてその口の中に

差し入れる。二人分のキスを同時になどできるだけがなく、当然哩と姫子は頬を合わせてカノウの口を取り合うように唇を合わせるしかなかった。

三つの舌が絡むと言う異常事態。そしてその相手の一人が姫子ということが哩の脳みそを溶かしてゆく。

「あ……つ」

だからだろうか、カノウが身体を離れたとき、哩は思わず声を上げてしまった。

「なんだ、哩」

「……………」

唇を押さえ、哩は視線を逸らす。

今の哩にはそのくらいしかなかった。

「ようやく俺の親番か」

ごきりと首を鳴らし、カノウは席へと着く。

哩と姫子も立ち上がりながらされ椅子に戻される。哩のローターと姫子のパイプのスイッチが入れられ、カノウの親番が始まった。

半荘のオーラス。

この時点で哩と姫子はほとんどの持ち点を吐き出して



いた。

敗因はいくつかある。

ローターとパイプの快感が頂点に達しようとしていたこと、カノウに対してもう一人の男が差し込みをしたこと、周囲の野次に集中を乱されたこと、負けることへのプレッシャーがこれ以上ないほど大きくなっていた事、拉致されてからこちら蓄積し続けた疲労。

だが、何より大きいのは哩と姫子の心が折れたことだろう。

「ツモだ」

手を公開し、カノウは腕を組み椅子に背を預けた。

「半荘二回は必要なかったようだな」

「あっ！ あひい！ おほおほおほおっつ！」

「ひっ！ ひぎっ！ ふああああああっつ！」

既にツモが三回、直撃が二回ずつ。計五枚のカードを二人は引かれた。

哩——『媚薬ローション』『手マン絶頂』『フェラチオ』

『素股』『尻穴舐め』。

姫子——『媚薬ローション』『クニニリングス』『シツ

クスナイン』『素股』『全身ぶっかけ』。

さらにローターとパイプの振動は最大にされ、二人は頭の緩くなった売春女よろしく身体中の穴から汁を垂らしながら喘ぐだけになっていた。

だがカノウは容赦なく箱へと手を入れカードを引く。その内容を一瞥し、カノウは部下たちに顎をしゃくる。

「終わらせてやれ」

「へい！」

男たちの足音が部屋を横切り、ガラスのすれ合う音をさせながら戻ってくる。喘ぎ声を上げ続ける哩は、その音をどこか遠くの事のように聞いていた。

(……なして……こんなことに……)

一体何が悪かったのか。これは何かの罰なのか。

悔悟と苦痛と快楽の中でぐるぐると思考が巡り、体の中で淀み続ける。それらが向かう先はカノウの言ったあの言葉。

——お前らは雌なんだよ。

否定しなかった。己の尊厳に賭けて。

そんなことは男の醜悪な欲を満たすための詭弁だと、暴力を笠に着た外道の行いだと。

なのに、



「ふああ?」

突然、尻に感じた異物感に哩の意識は浮上し、視界に鮮明さが戻る。

いつの間にか、哩は床に四つん這いにされており、男たちに手足を押さえつけられていた。無理矢理に背後を向くとそこにはガラスシリンダーを尻に押し付けた男の姿があった。

「こ、こりえ!」

「見ての通り、浣腸だ」

言い、カノウは哩の前にカードを投げてよこす。

見ればすぐ向かいではザーメン塗れの姫子も同じ格好を取らされ、浣腸器を尻に突き込まれている。

「ただの浣腸じゃねえ。女の仮面を剥がす特製のスパイスをブレンドしている。吸収率の良いケツで飲み込めば、あつという間に全身に回る。尻穴から糞をぶちまける頃にはお前らは『雌』としての自覚に目覚めるって代物だ」

「そ、そんなあ……卑怯おお……っ!」

「世の中に卑怯なんて言葉はねえよ。あるのは現実に即した結果だけだ」

カノウの腕が哩と姫子の髪を掴み上げる。

「この勝負、十中八九お前らの勝ちだった。リスクを背負わないで終わらせようなんて考えなきゃな」

「……っ!」

「お前らが人生を賭けて腕を磨いてきた麻雀という勝負でさえお前らは勝てなかった。それは雄の庇護なしじゃ生きられない『雌』の証明だ。違うと言うなら証明して見せな。この最後の一局でな」

ぶち入れる。

カノウの号令と共に一リットルに及ぶ媚薬浣腸が二人の尻に注ぎ込まれた。

半荘オーラス。

それはもはや麻雀の体を成していなかった。

浣腸による便欲と媚薬による発情状態、それにマシンパイプの責めに姫子は四打目を打った所で力尽きた。

「あ……あはあ……おおほ……」

哩もまた追いつめられていた。浣腸と媚薬、そしてローターによる責めは彼女を追い詰め、意識はほとんど失いかけていた。そんな哩だが、その右側にはずらりと並んだ白と發がある。さらに哩の手の中には中の暗刻。

『大三元』。

麻雀で定められた最高の役、役満手である。それは現状、哩がトツプを取ることでできる唯一の方法でもあった。それを哩はこのオーラスで引き寄せたのだ。

カノウが打牌する。哩はその捨て牌を穴が開くほど凝視する。

役満の大三元とはいえトツプを取るにはカノウから直撃を取らなければならない。そして哩の腹はそれを悠長に待てる状態にはなかった。

浣腸液は哩の腸内に十分浸透し、排便をこれでもかと促してくる。便意はもはや暴力と何も変わらない。腹の内側からナイフで刺されるような痛みと嵐のような圧力に哩の顔は真っ青を通り越して真っ白になっていた。

時間の感覚が狂い、一秒が千日に引き伸ばされる。

何時間も経過したと思ったら十秒も経っていなくなった。逆にほんの一瞬目を離したと思ったら手番が一巡していたりする。

ぎゅるるるごろろろろろろろっ！

「良い声で鳴くじゃねえか！ 下の口の声も早く聞かせろよ！」

哩も多くの女性に漏れず便秘がちな体質である。しかも今日は便秘四日目であった。そこに一リットルもの浣腸液を注ぎ込まれてしまったのだからともで居られるはずがない。

もちろん哩も浣腸の世話になったこともあった。だが使ったことがあるのはせいぜい三十ミリリットルのディスプレイザブル浣腸だ。今、哩の中にあるのはその三十倍以上の量。そして合わせて入れられた媚薬の毒も哩の中で暴れはじめていた。

最初は発熱、全身がぼんやり熱くなり、汗が噴き出る。続いて全身が腰の辺りを中心にじんじんとした痺れが広がる。

そして、

(痒い！ 痒い！ 痒い！ 痒い！ 痒い……っ!!)

股間と尻、と乳房を中心に広がる猛烈な痒さ。蚊に刺される痒みを百倍にしたかのような感覚に哩は気が違っでしまいそうだった。

刺激が欲しい。

触れる、搔く、叩く、擦る、摘まむ、何でもいい。

とにかくこのむず痒さを何とかして欲しかった。

「……ひっ！」

ぶっ！ ぶびっ！ ぶふう~~~~~ぶっ！！

「ははははっ！ でけえオナラだなおい！」

風呂釜をひっくり返すような哄笑が浴びせかけられる。実の所、二人に浣腸をする際にかんりの量の空気を一緒に押し込んでいた。そうすることによって盛大なオナラを女性にする事になり、排便の時にも卑猥な音を鳴らすことになるからだ。

もちろん哩がそんなことを知る由もない。それに哩の頭の中は全く別のことでいっぱいとなっていた。

(あ…ああ…：気持ちよかよおお…：っ！)

放屁という女性が恥ずべき行為に対し、哩は快感を覚えていた。極限まで焦らされた肛門にはガスが通り抜けるというだけでも恐ろしいほどの快楽を哩に与えていた。(オナラでこれなら…：もし、出してしもうたら、どうげん…：…になると?)

ごくり、と哩の乾いた喉が息を飲む。

腹の中で肛門を叩き続ける哩の糞。浣腸で限界まで高められた排便欲を思いきりひり出したらどうなってしまうのか。

恐ろしかった。

それは自分という存在を吹き飛ばし、頭の中を一瞬间にして書き換えてしまうのではないだろうか。

(そ、それに…：…もし、もしも…：アレをされたら) 哩はカノウを見る。

その服の下に隠されたカノウの陰部を見る。

キスをした時に感じた逞しすぎる肉体。あの身体を使い、自分の無茶苦茶にされたら本当にどうなってしまうかわからない。

自分は壊れてしまいかもしれない。

それをわかつているのに、哩はカノウから目が離せないでいる

(…：欲しか…：欲しかよお…：っ！)

眉を寄せ、身体を縮こませる。

自分が今感じている感情が何なのかもわからない。

全身から汗を流しながら、哩は砂漠を彷徨う遭難者のように呼吸する。

「手前の番だぞ」

「うあ…：…」

言われて初めて、姫子の後ろに立つ男がツモ切りをし

だ。ろおんろおん、と奇妙な声を上げつつ顔中の穴から汁を漏らす哩を、カノウはきつちり三十秒待った。

「終わりだな」

カノウは哩と姫子の髪を掴み、身体を起こさせる。

「あひい！」

「ほおお！」

パイプとローターを力づくで抜かれ、哩と姫子が甘い声を上げる。二人の尻穴がふわっと広がり穴から人体の土石流が殺到するが、がすぐさま背後の男たちがその穴を指で塞ぐ。

二人は卓へと押し付けられた。ちようど机を支えに尻を突き出す形だ。その後ろには高解析度のカメラが正面から二人の姿を撮り続けている。

汗の浮いた尻、ヒクつく股間、指を突き込まれ茶色い涎を垂らすアナルのシワまで全てがビデオに記録される。『雌』デビューとしちゃ、勿体ないくらいに舞台じやねえか。まずは尻穴で挨拶して貰おうか」

「あ、あ、まつへえ…まつへえ…ろお、ろおん……」

「おほ……おわると……ぜんぶぜんぶうううう……」

ずぼっ！

「おっひっ！」

「はがあっ！」

二人のアナルから指が引き抜かれる。

はくはくと、二回アナルが開閉した。

ぶばばばっ！ ぶばぶぶっ！ ぶりゆりゆりゆっ！！

ぶび〜〜〜ぶび〜〜〜ぶび〜〜〜ぶび〜〜〜ぶび〜！！

「ほああああああああああああああああっ！」

「おひいひいひいひいひいひいひいひいひいひいっ！」

浣腸液に溶かされた液便が二人の中から飛び出した。

その勢いは凄まじく、限界まで開けた蛇口の水のごとき勢いで曲線を描く。跳ねた糞便は三メートル離れていたカメラまで飛び散り、レンズに未消化の豆の欠片を張り付ける。

やがてその勢いも衰えて行くが、続いて出てくるのは二人の中で熟成された固形便だ。

「あ、あ、くりゆううううううううううううっ！」

「あ、が、くひいひいひいひいひいひいひいひいひいっ！」

十分にほぐされたアナルは、女子〇生にあるまじき柔軟さで口を開き、極太の便秘便をひり出していく。

みりみりと肛門が悲鳴を上げるが、その痛みこそが哩と

「姫子を狂わせる。媚薬が全身に回り、我慢に我慢を重ねた彼女らにとって、この刺激は今までの人生を塗り替えるほど強烈なものだった。」

肌を焼く照明の熱さ、男たちの好色な視線、濡れる股間と自分の全てをぶち撒ける快感。それらが唾と姫子を生まれ変わらせる。

「お、ほおほお……」

「はえはへええ……」

ちよろちよると小便を漏らしながら、二人は麻雀卓に突つ伏す。その尻はぼつかりと開き、淫靡な蠢きを繰り返していた。

がちやり。

自らの首から聞こえた音を二人はほとんど聞いていなかった。

ぐいと喉を引かれ、顔を上げさせられて、ようやく二人は自らの首にかかった鉄の輪に気付く。

リードを握りしめたカノウは二人を見下ろしながら問いかけた。

「俺は誰だ？」

何度も問いかけられた質問。

だが唾と姫子にとってカノウのこの問いかけは全く別の響きに思えた。

強要ではなく、解放。

自分の中の殻を破るための一押しだった。

「カノウ様は……」

眉が寄せられる。頬が緩む。口の端から涎が垂れ、鼻

先が体臭を嗅ぎ取る。

甘い吐息と共に二人ははつきりと答えた。

「——私たちのご主人様です」

カノウは実に嬉しそうに笑った。

出来の悪い教え子が難問を解き切った教師の顔だった。

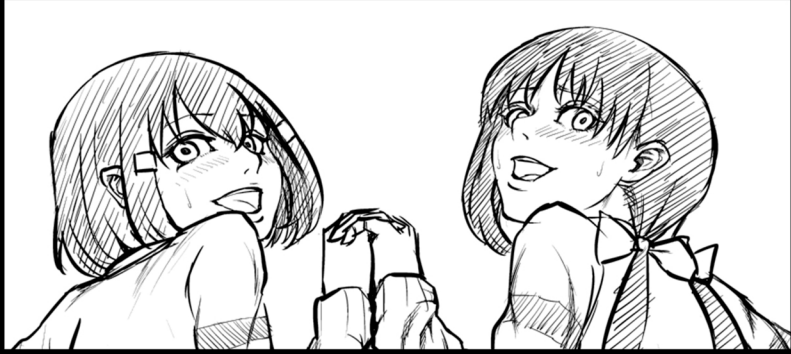
「よし！ 新しい『雌』共！ 今からきっちり雌の仕事を教え込んでやる！ せいぜい俺を飽きさせないよう奉仕しな！」

カノウが手を叩き、部下たちがベッドマットを運ぶ。

無数のカメラが動き出し、床に広がる糞尿が片づけられる。部屋に運び込まれる数々の道具と薬品。

（ああ——）

これから身体も改造されるんだ、と唾は思った。



続
き
は
本
編
で

